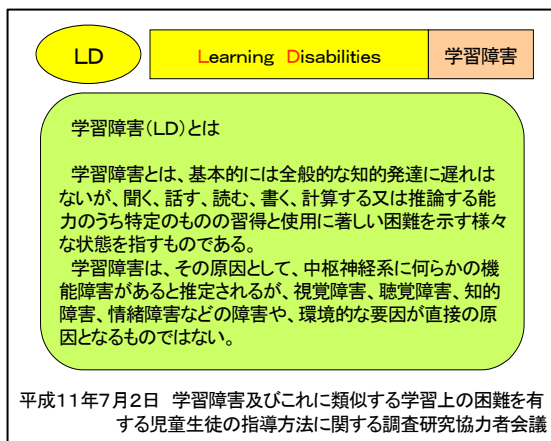


IV LD（学習障害）とは

1 学習障害（Learning Disabilities）とは

Learning Disabilities の頭文字をとって「LD」と表すこともあります。

平成11年に文部省（現文部科学省）から下記のような定義が出されました。



【要 点】

- ・ 全般的な知的発達の遅れは見られない。
- ・ 学習上の基礎的能力のうち特定のものを習得し、使用することに著しい困難がある。

小・低学年・・・1学年以上の遅れ

小・高学年、中学校・・・2学年以上の遅れ

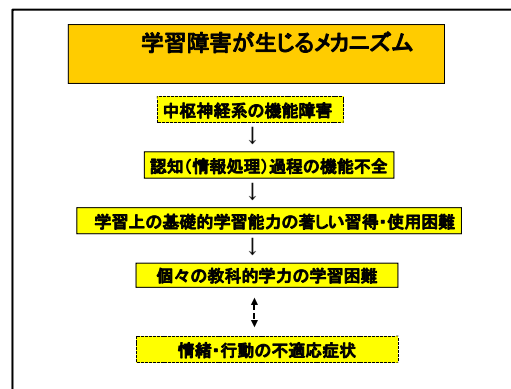
- ・ 中枢神経系に何らかの要因による機能不全があると推定される。
- ・ 視覚障害、聴覚障害、知的障害、情緒障害などの障害や、環境的な要因が直接の原因となるものではない。

2 LDが生じるメカニズム

定義にもあるように、中枢神経系に何らかの要因による機能不全があると考えられています。そのことにより、認知過程（さまざまな感覚器官を通して入ってくる情報を受けとめ、整理し、関係づけ、表出する過程）が十分機能せず、学習上の基礎的能力（聞く、話す、読む、書く、計算する又は推論する）の著しい習得・使用の困難に結びついていると考えられます。

また、不器用であるとか運動面や動作の能力、注意力が散漫で落ち着きがないという行動面や対人関係などの社会的適応性の問題は、定義の中核症状とはされていませんが、これらの問題を伴う場合が多いので、指導にあたっては十分に配慮する必要があります。

また、特異な学習困難から自信や意欲をなくしたり、自己評価が低くなったりして生じる二次的な障害に関しては十分な配慮をしていかなければなりません。



3 LDの特徴

聞く	話す
○集中して話を聞くことができない	○話しているうちに話題が飛んだりずれたりする
○何度も聞き返す	○指示代名詞を使つての会話が多い
○似た音を聞き間違える	○助詞がうまく使えない
○聞かれたことと違う答えをする	

読む ○促音、拗音などを読み間違える ○似た文字の弁別ができない ○文字をぬかしたり、付け加えたりして読む ○行を飛ばして読む ○読解が困難である	書く ○鏡文字がある ○ノートへの書き写しに時間がかかる ○漢字など一画多く（少なく）書いてしまう ○まとまりのある文章が書けない
計算する ○筆算で桁をそろえて計算できない ○かけ算九九の習得に時間がかかる	推論する ○一つ一つの文は読めるが、それらをまとめて理解することが難しい ○図形をうまく書き写すことができない
その他の特徴 ○社会的知覚の問題 社会性の困難 ○身体的知覚の問題 体全体を使う動き 微細運動	この他のつまづきをみせることもあります。 子どもの様子をよく観察することが大切です。

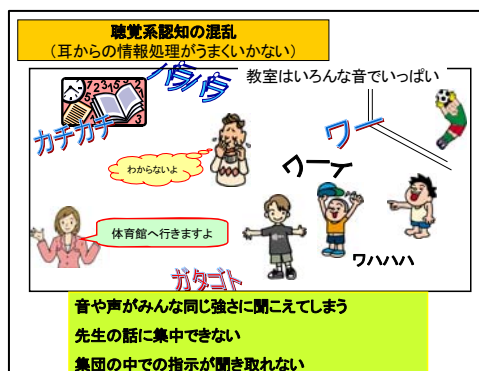
LDは、中枢神経系に何らかの機能障害があると推定されており、そのため下記のような認知の混乱が起きていると考えられます。

(1) 聴覚系認知の混乱

私たちは話を聞くとき、「聞き取りたい音や声（図）」に注意を集中して、「他の音や声（地）」は意識の外にしています。しかしLD

の子どもの中には、聞いて理解することがうまくいかない子どもがいます。そのために、似た音を聞き誤る、内容の理解ができない、勘違いのような行動が見られる、落ち着きがないように見えるなどの様子が見られます。

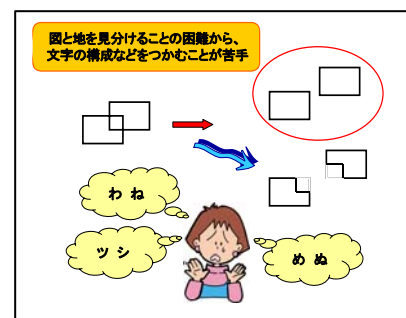
また、短い時間だけ記憶にとどめておくという短期記憶の弱さが加わると、指示されたことを忘れてしまう、くり下がりのある計算をするとなりから借りたことを忘れてしまうなどの困難も見られます。



(2) 視覚系認知の混乱

私たちは何かを見ようとするとき、「見たいもの」を浮かび上がらせ、その他のものは意識の外におくことにより「見る」ということができます。しかし、視覚系認知の混乱がある場合、教科書の文字を追えない、行を飛ばし読みするなどの様子が見られます。

また、重なりのあるものが苦手な場合、よく似た文字を読み間違え、漢字を書くと線が足りなかったり多かったりする、細かい部分が不正確であったりすることがあります。そして、空間認知（ものの位置関係・上下、左右、前後、東西南北、遠近、縦横等）、の混乱がある場合には、地図の見方がわからない、体の身体部位の感覚がつかみにくい、ロッカーの位置がなかなか覚えられないなどの様子が見受けられることもあります。



LDの子どもたちへの支援は、どのように行えばよいでしょうか

LD（学習障害）といっても、その症状は様々です。まず、一人一人のつまずきや支援の必要な部分を把握し、個に応じた手立てを考えていくことが大切です。

1 子どもを大切にしたかわりを

つまずきの様子（いつ・どこで・どのような）をよく観察し原因を探ります。

一人一人特有の学び方があるという視点を持ち、できないところだけでなく伸ばしたい面もみつけましょう。

一人で抱えこむのではなく、複数の教員の共通理解のもと指導を行う必要があります。

2 学習指導の工夫

LDの子どもたちは、学習内容を習得するのに時間がかかったり、その子ども特有の困難さがみられたりします。授業の際には、学習の見通しが立ち、学習に取り組みやすいようにしましょう。

3 成就感を味わえるようにし、自信をつける

一度に多くのことを求めず、できるようになったことをほめるようにします。「できた」という経験を積み重ねることで、学習に対しての自信が生まれ、意欲的で主体的な活動につながっていきます。

4 有効な学習の場の設定

LDの子どもたちは通常の学級に在籍しており、通常の学級における指導を基本に対応していくことが重要です。しかし、学級担任の指導を確かにするために、教職員の共通理解を図ることも大切です。T・Tや特別な指導による対応など個に応じた手立ても工夫しましょう。

5 具体的な支援・指導

(1)「聞く」ことが苦手

「注意の集中に問題があって話が聞けない」

「言われていることが理解できないために聞き返してしまう」「理解はできているけれど記憶することができなくて忘れてしまう」ということが考えられます。まず、注意を喚起してから話すように心がけましょう。

そして、例えば、発問する前にそっと肩に手をあてる、絵や写真、カードなど視覚情報を用いて集中を助けるなどの支援があります。また、伝言ゲームなど「聞く」ことで楽しめる要素のあるものを取り入れていくことも有効です。



(2)「話す」ことが苦手

「事柄や順序を整理して話すことが苦手」「会話が一方的で話題が飛びやすい」「似ていることばを間違えてしまう」ことが考えられます。このような場合には、時間や順序に従いカードに書いて話をする、「はじめに」「次に」「最後に」などの話し方のパターンを練習する、話し始めに何について話すのかを確認してから話し始めるなどの指導が考えられます。

(3)「読む」ことが苦手

「目で字の形を捉えることが苦手」「一行のなかに並ぶ文字を追いかけてたりすることがうまくできない」場合があります。また、「拾い読みのため、意味上のかたまりとして単語を捉えることができない」「文字を間違った音として覚え、そのままで読んでしまう」ことも考えられます。

まず、「ひらがな、カタカナ」を正確に捉えているかを確認してみましょう。そして、単語として把握できているかも確認してみましょう。フラッシュカードを使う、指で文字を追う、スリットの入った用紙を活用し読む行だけが見えるものを使用する、ことばの意味理解を補うことも必要でしょう。

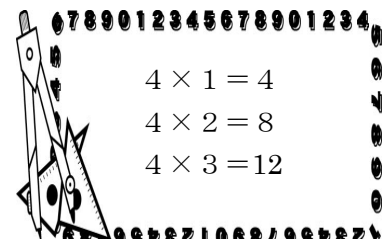
「音読」の学習では、授業前に読む場所を決め、いっしょに練習することなども支援の一つとして考えられます。

(4)「書く」ことが苦手

「目で見ただけの情報を正確に捉え、文字という形で表現することが苦手」「不器用のため書くことへの抵抗がある」ことなどが考えられます。また、「聞いた音と文字を対応させることができない」こともあります。このような場合、拗音、促音のつまずきも考えられます。支援としては、生活のなかで経験することや身近にある物を活字にする、また、文字の大きさ、使用するノートのマス目の大きさ、色等への配慮をしてみましょう。また、不器用な子どもへは濃い鉛筆の使用、グリップの使用も考えられます。そして、子どもの正面で指示し、ゆっくりとした口調で話すことを心がけ、聞く音と文字とを対応させる手立ても必要でしょう。

(5)「算数」が苦手（九九、筆算等）

九九を覚えることが苦手な子どものなかには「聴覚系の認知の弱さ」「短気記憶の弱さ」がある場合が考えられます。また、分からないための不安や混乱が九九を覚えることへの妨げになっている場合があります。カセットテープの使用、九九カードの使用等が考えられます。



筆算の苦手な子どものなかには「空間認知の混乱」があるために、位がうまくそろえられない、また「短期記憶の弱さ」があるために、くり上がったことやくり下がったことを忘れてしまい計算間違いがあるなどが考えられます。このような場合には、マス目のあるノートの使用、くり上がりくり下がりの方の数の記入、ノートやプリントの背面の色を変えてみるなどの手立てが考えられます。

いくつかの困難と支援について述べてきましたが、これは一部に過ぎません。ですから、例えば「聞く」ことが苦手であること一つをとっても、この他の背景がある場合、支援の方法も変わってきます。子どもの様子をよく観察し、実態把握をしっかりしていくことが基本となるでしょう。